

（は、入ってる!? 私のなかに洋、全部入ってるの!）

歯を食いしばり痛みに耐えながら、恐るおそる結合部を見た。

「あ……入ってる……洋のオチンメン、私のアソコにいっぱい入ってるよお……」

優羽子の胎内に、すっぱりとペニスが収まっているのがはっきりと確認できた。膣壁を熱棒で炙られるような痛みはつづいていたが、ついに洋と結ばれた満足感が遙かに上まわっていた。

「ううう……よかった……お姉ちゃんの処女、お前にあげられてよかったよお」

今度は安堵感と嬉しさから涙が溢れてきた。しかし、まだ肉棒を膣のなかに収めただけにすぎないのは優羽子もわかっている。本当に痛いのはこれからだということも「ごめんね洋……私、足に力が入らなくて動けないの。だから……」

だから、お前が動いて。

目でそう訴えかける。

「……………」

洋はそんな優羽子の想いを察したのか、意を決して腰を上下に振りはじめた。

「アアッ! こ、擦れる……っ!」

初体験の姉を氣遣っているのだろう、洋の動きは非常に小さく穏やかであったが、

処女を喪失したばかりの優羽子にとっては、それでも悲鳴をあげたくなるような痛みがあった。

「い、いたっ……ダメ、そんなに動いたら……んはあ、ひっ、くひ……っ！」

傷口を冷水で強引に洗い流すような、そんな痛みが間断なくつづく。痛みから逃れようとしても、下半身がまったく動いてくれない。まるで腰が抜けたように、優羽子はただ、洋の突きあげに合わせて身体を揺らし、呻き声をもらすことしかできないでいた。

「姉さん……」

洋が動きをとめようとする。

「ダメ、やめちゃダメ！ さ、最後まで……んう……ちゃんと最後までしてっ！ 私のこと、ちゃんと責任もって女にしなさいよ、バカあ！」

怒ってるのか拗^すねてるのか、もう優羽子自身、なにがなんだかわからなくなってきた。ただ、洋に擦^すられている下腹部が異様に熱い。それだけは妙にはつきりと知覚できた。

「あっ、あっ……はああ、あん、ああああ……っ！」

声が勝手に口からもれでる。たださっきまでと違うのは、痛みを堪^{こた}える呻き声では

なく、どこか切なげな、吐息にも似た声に変化してきたことだ。

（あ……少し、楽になってきた、かも？……）

洋が無茶な動きをしなかったせいだろうか、あれほどひどかった痛みが徐々にではあるが治まってきた。痛くないことはないが、耐えられないほどではない。

（こ、これくらいなら）

自分から誘ったのだからと、優羽子は勇気を出して腰を前後に揺すってみた。

「ンンンっ！」

突然、今までに感じたことのない感覚が全身を駆け抜けた。

（なに、コレ？）

もう一度腰を揺すってみると、

「んはあっ！」

再び同じ感覚が電流となって背中を駆けあがっていった。痛みで硬直していた膣壁が少しずつほぐれ、粘り気を帯びた愛液が分泌ぶんびつされはじめる。

「ね、姉さんのなかで、急に締まってきた……っ」

そんな反応を見せる洋にも気をよくし、優羽子は次第に腰の動きを大きく、そして速くしていった。

「んっ、んっ……あはっ、はああっ……あん、んうん……っ」

まだ快感と呼べるほどのものではないが、それは明らかに女としての反応だった。まだ滲^しみるような痛みは残っているが、耐えられないほどではない。

「ああ、熱いよ……お前のオチンメン、すっごく熱くて大きい……っ！」

二人はどちらからともなく互いの手を握り合い、腰の動きをシンクロさせていた。ピストンと呼ぶには穏やかすぎる、相手を思いやるような腰の蠢^{うごめ}き。

「イッて……私の奥に、いっぱい洋の精子、出して！……お姉ちゃんをお前で塗りつぶして……っ！」

眉根を寄せて、優羽子が膣内射精をせがむ。

「あああ、出ちゃうよ……姉さんのなかにいっぱい出ちゃうよ！……」

ぐりぐりと尾てい骨を押しつけるような優羽子の動きに、洋が限界を迎えた。

（あ……出る!?……）

一瞬、膣のなかで亀頭がふくらむのがわかった。射精される、そう思った直後に、
「んうううううッ！ ああっ、熱い……んん……っ！」

熱い衝撃が優羽子の膣内で炸裂^{さくれつ}した。

（出てる……洋の熱いのが、たくさん奥に飛びでてる……っ）

